

例で悪性心室性不整脈の出現頻度が高いという結果を得、肥大型心筋症の予後を推定する上で負荷 ^{201}Tl 心筋イメージングは有用と考えられた。

19. 拡張型心筋症における運動負荷時左室反応性の検討

岩瀬 孝 久保田修平 高橋 雅治
 桜井 文雄 飯塚 利夫 今井 進
 鈴木 忠 村田 和彦 (群馬大・二内)
 五十嵐 均 井上登美夫 佐々木康人

(同・核)

DCM 8 例, 安静時左室駆出率 40% 未満の陳旧性心筋梗塞 (OMI) 8 例を対象に, $^{99\text{m}}\text{Tc-RBC}$ 運動負荷心ブールシンチグラフィを施行し, 運動負荷時および回復期の左室駆出率 (LVEF), 拡張および収縮末期容積の変化, 左室 Asynchrony を検討した。両群とも負荷時および回復期に LVEF の増加はなく, 差を認めなかったが, OMI では DCM に比し, 回復期 ESV は有意に減少し, 負荷時の Asynchrony も高度であった。EDV は両群とも有意な変化を認めなかった。DCM の運動負荷左室反応様式は, OMI と異なり, 病態の相違が示唆された。

20. 肺血栓塞栓症における肺血流シンチグラフィの重要性

齋藤 了一 大石 卓爾 渡 潤
 林 宏光 奥山 厚 山岸 嘉彦
 恵畑 欣一 (日本医大・放)

肺血栓, 塞栓症と診断された 28 症例において, 肺血流シンチの有用性を検討した。塞栓の原因は大別して, 血栓, 脂肪, 腫瘍, 医原性があり, 肺血流シンチグラムは, 胸部 X 線写真上の変化に乏しい時期から葉性, 区域性の欠損を示した。ただし軽症状なものや, 心筋梗塞があり本症とまぎらわしいもの, 腫瘍症例では本検査施行時期が遅れがちであった。

また, 本症と下肢血栓性静脈炎との関わりはきわめて深いものがあり, 下肢 RI 静脈シンチないしは下肢静脈造影を必ず実施すべきと考えた。肺血流シンチは施行も容易で苦痛も少なく, 本症が疑わしい場合, まず行われるべき検査であり, 本検査により診断可能な肺血栓塞栓症も多く, 治療開始までの期間短縮に少なからず役立つ

21. ウィスターラットを用いた $^{123}\text{I-IMP}$ 肺内分布に関する実験的研究

河原 俊司 小須田 茂 石橋 章彦
 田村 宏平 (国立大蔵病院・放)
 久保 敦司 橋本 省三 (慶応大・放)

ウィスターラットを用いてスポンゼルによる実験的肺塞栓を作製し, $^{99\text{m}}\text{Tc-MAA}$ による肺シンチグラフィと対比検討することにより, $^{123}\text{I-IMP}$ 肺集積の動態を観察した。一部の肺組織標本について病理的検討を加えた。

その結果, 塞栓の形態により, 塞栓部末梢肺野の血流は左右され, $^{123}\text{I-IMP}$ 初回循環で完全欠損 57% (8/14), 血流低下 43% (6/14) であった。血流低下領域では $^{123}\text{I-IMP}$ の Wash-out が悪く, Delayed image で相対的集積増加を示すことが多かった。 $^{123}\text{I-IMP}$ 初回循環で完全欠損領域は Delayed image においても欠損像を示したことから, 肺塞栓急性期では気管支動脈経路による $^{123}\text{I-IMP}$ 集積はきわめて少ないと思われた。

22. $^{123}\text{I-IMP}$ 肺シンチグラフィの因子分析による検討

小須田 茂 河原 俊司 石橋 章彦
 田村 宏平 (国立大蔵病院・放)
 久保 敦司 橋本 省三 (慶応大・放)

各種肺疾患患者の $^{123}\text{I-IMP}$ による肺動態イメージを因子分析法を用いて解析することにより, その臨床的意義を検討した。

8×8 圧縮データにおいて, 8 Dixel 選択による 3 因子分析で血流相 (鎖骨下静脈, 上大静脈, 右心系), 排泄相 (正常肺), 停滞相にほぼ分離できた。停滞相の因子画像は肝, 心を描出しており, 静注後 3 時間以後の Delayed image 上の異常集積部位が予測可能と思われた。停滞相で分離抽出できた肺病巣部は $^{123}\text{I-IMP}$ 初回循環時の血流低下域 ($^{99\text{m}}\text{Tc-MAA}$ スキャンで欠損ないし菲薄像) を反映していた。肺癌病巣部は因子画像として描出されなかった。